

あのひと
私の
事情

ボクと
彼女の
事情



ADULT
ONLY



あのコと私の事情

ボクと彼女の事情

今日もあのヒトはスーツを着てオーディション会場へとやってくる。

涼しげな微笑をふりまいて颯爽と過ぎてゆくあのヒトが、並み居るアイドルたちの中でも独特の存在であることは、ボクも認めている。

いや、認めざるを得なくなったといったほうが正しいのかもしれない。

まったく…このボクにあのような屈辱をあわせた人のことをこうして意識しているだなんて。自分に対して毒づきながら、ボク、輿水幸子は東郷あいさんから視線を外した。

あの日、ファッション誌の男装モデルオーディションに敗れたボクは、オーディションに勝利したあいさんの楽屋にしのび込んだ。

そして彼女のコーヒーに睡眠薬を含ませて拘束することに成功。

ええ、そこまでは良かったんです。あとはいつも通りボクのカワイイところを見せ付けてあげれば良かっただけのはずだったのに…ああもう…!

「ん……………こは…」

おかしい。控え室に戻ってコーヒーを飲んだあからの記憶が無い。

東郷あいには、混濁した意識の中でそんなことを考えながら、ゆっくりと瞳を開いて焦点を定めようとする。

「気づきましたか。思ったより早く目覚めたのは褒めてあげますよ」

聞き覚えのある声に視線を動かすと、そこには輿水幸子。ただし、先ほどまでオーディションをしていたときの男装ではなく、純白に小さくレースのついた下着の姿だ。

そして自分は控え室のソファに衣服・下着をはだけさせられた状態で倒されており、両手両足はスカーフでライトスタンドと机に拘束されていた。

その嗜虐的な表情と状況を照らし合わせると、たどりつく結

論はひとつしかない。

「察しも早いみたいだ。なら覚悟を決めてくださいね。ボクの魅力をその身体に叩き込んであげますから」

小悪魔的な笑みを浮かべて、幸子はあいに馬乗りになる。

「く、キミはいつもこんなことを？」

「ええ貴方みたいな聞き分けの無いヒトには教育をしないと
いけないですからね」

そういつてあいの身体に手をのばす。

「まったく、こんな無駄なものをつけて……」

忌々しげにつぶやきながら、幸子はあいのブラを外す。極端に大きいわけではないが、ぶるんとしたあいのバストが、拘束をとかれて揺れる。それを、彼女は強引にもみ潰した。

「うん……くっ、もう少し、加減というものをだ、んあ
あアア！」

「ぶん、そんなもの必要ないですよ。こんなものね、こうしてやるくらいがちょうど良いんだ！」

自分の胸にはない豊かな膨らみへの嫉妬心を隠さず、彼女の爪があいの乳首に立てられる。

「あアン！？」

「ほら、感じてるじゃないですか！この淫乱！」

腰を揺らしてリズムを取りながら、幸子は右手であいの胸をもてあそぶ。同時に左手をするするとあいの股間に伸ばし

「そ、そこは……ッ」

「分かりますよ、シヨーツの上からでもね」

戸惑いを見せるあいに対して、幸子はニヤリと口の端を吊り上げた。そしてか細い指をコの字にまげて、シヨーツの内側へと滑り込ませる。

「あっ、いきなり……そんなに……激しくするのはいいが、ンンン！飛ばしず、くうんっ」

「口ではそんなこと言いながら、反応は素直ですね、こんなにビクンビクンさせて！ハハハ、無様ですよ！」

あいの感じている様子に欲情しているのだろう。瞳を少しう

るませて、うわずった声を出した。

「あ、はあアアッ、あっ、あっ、アッ……！」

幸子は反応の良い肉体に思わず食い入る。今まで籠絡してきた同世代の相手は、初々しい反応は見せるものの、このようにひとつひとつの刺激に確実に反応することはなかった。

「まったく、これが開発されてるってことなんですか、ね……！」

あいの肉体に、思わず飲み込まれてそうになる。このままその胸にむしやぶりつき、抱きしめてしまいたい。

だが、それは自分の魅力を教え込むことではなく、抱擁だ。そんなことは許されないとばかりに勢いを増した幸子の責めにも、あいはしっかりと反応を見せ、ギシギシとゆれるソファの上でもだえ続けた。

「くっ、あん、ふウンッ………どうした……まだまだこれから、だろ、う？」

だが、それでも貪欲に求めてくるあいの様子に、思わず幸子は舌を巻く。

ならば、と彼女は一度立ち上がった。

「ふん、とんでもない淫売ですねアナタは。良いでしょう。これを使ってあげますよ」

言いながら、バッグの中から双頭のディルドーを取り出す。そしてあいに見せ付けて

「これが欲しいんでしょう？分かりますよ。ボクは優しいですからね、これで犯しぬいてあげます」

「ふ、フフ……よろしく、頼むよ……」

荒い息を落ち着かせながら、幸子の様子をあいは観察していた。先ほどから幸子が自分の上で腰を振り続けていたせいで、手足のスカーフは緩み、拘束を外そうと思えば外せる状態になっている。

だがそのことに、幸子は気づいていない。あいの肉体を攻略することに夢中になっているからだ。

「く、ふう、んんっ……」

挿入する異物感に甘い声を小さく上げた幸子は、自分の股間に刺したディルドーの反対側をあいのヴァギナにあてがい、

「いきますよ。ボクの魅力を叩きこみながら、最高の快楽を与えてあげます」

「それは、どう…かな？」

瞬間、あいは両足の拘束を勢い良く解くと、幸子の腰を両足で抱え込み、強引に自分に引き寄せる。

「ひあああー？」

「くうん…！」

重なるふたつの嬌声。急に互いの子宮口までディルドーが突き刺さったのだから、当然だ。

「な、ンア！いつの間…！」

焦りの色を見せてあいを組み伏せようとする幸子を、両足でさらに引き寄せる

「ふああああッッ」

「くううう！」

続けざまの刺激に喉をふるわせた彼女のスキをついて、あ

は手を伸ばす。

その先にあるのは、部屋の照明スイッチ。パチン！という軽快な音と共に室内は一瞬だけ暗闇に落ちて明滅した。

「な、何を…ふわああんツー？」

その瞬間、互いにつながった状態のまま、あいは幸子の乳首を捕らえる。

そして腰をグラインドさせながら両手で幸子の乳首を優しくなぞった。

「ほら、こつするだけでも感じるだろう？強くもみしただけが愛し方じゃない。相手によって刺激の方法を変えなくては、いけないよ」

「え、えらそうな、きゃ、ンハ、ハアアッ」

必死に抵抗しようとするが、あいから与えられる刺激に幸子は可愛らしい声を上げてもたえる。

「相手に自分の魅力を伝えるためには、相手を良く理解しないといけない。それがまだ足りないようだね」

「くうう、バカに、バカにしないで、やあ、ン、ンンンンン…？」

必死に反論しようとするが続けてあいの手が伸び、結合部のクリトリスを刺激する。

「きゅううんっ」

口をおさえて幸子は震えた。

頬を紅くそめあげて身もたえするその様子に頃合を見ると、あいは上体を起こして幸子を押し倒そうとした。

幸子はその動きを察知すると、

「な、なめるなあああー！」

自分に言い聞かせるように、大きな声を出して、勢い良く後ろ手をつく。

「ふうん！」

「ひゃあああアツー！」

予想外の刺激に声を上げたあいを感じて、汗をたらしながらも幸子是不敵な笑みを浮かべた。

「フ、フン…やっぱり感じてるんじゃないですか。えらそうなこと言いながら、ボクの魅力にやられていたんだ。ほら、さっ

さと屈服してください！面倒な人ですね！」

どう考えてもいく寸前の声色で、必死に強がりながら幸子は腰を前後に動かし始める。

「まったく…ンッ、元気だ、な」

幸子の動きにあわせるように、あいも腰の動きを再開する。証明に照らされ美しい肢体が輝く中で、ふたりのあえぎと、結合部からする卑猥な音だけが響く。

「ほら、ほらほら！もう、イってくださ…イって、イって下さいよおお！」

かすれた声で、半ば懇願するように幸子は叫んだ。

「そうは、いかない…んだな。ふうっ、あウン！」

「ボクが、ボクが一番なんだ、ボクが…！」

自分に言い聞かせるように、いや、すがりつくような声でそうつめく幸子を感じ、あいは強く、深く、腰を打ち据える。

「ほら、ン、ンン！もっと動く…よ！」



「ああ、そんなにかき混ぜちゃ、くううん、こんな、こんな
ヒトにボク、ボクが……」

その的確な挿入に、よだれをたらして目を見開き、支えていた腕すらも崩れさせながら幸子は大きく喘いだ。

「ダメ、もうダメ、ダメえええええええ、ひいいいいい
い……い……」

ガクガクと官能を全身で受け止めながら崩れ落ちた幸子を、
ディルドーを抜いたあいは抱き寄せた。

「どうした、浮かない顔をして」

ボクがあのだよどしい出来事を思い出していると、いつの間にかあいさんがこっちを覗き込んでいた。

「別に。大したことじゃないですよ」

「そうか。ところで今日はどのオーディションに？」

「ああいえ、あいさんたちと違ってボクはインタビューですよ。

今度こちらで可愛いボクの特集を組むそうなので」

ま、当然のことですけど。とボクは肩をすくめた。

当たり前だ。ボクのような可愛いアイドルはもっと注目されるのが普通で、今までが異常なんだ。

「なるほど。じゃあ次の表紙はキミか」

「でしょうね、これでまた有名になってしまいます」

「それもキミにとっては至極当然のこと、かな？」

「そうですよ。違いますか」

貴方だってそうでしょうとボクは彼女を見上げる。ボクが自分の可愛らしさに絶対の自信を持っているのと同様に、あいさんは自分の美しさを誇っている。

「キミにその素質があることは事実だ。だから、その榮譽に浴する権利はあるに違いないと思うよ」

「まわりくどい言い方ですね」

「クセだね、気になったら謝るけれども」

「構いませんよ。ボクの周りにはそういう人が少ないから新鮮に感じるだけです」